Vol.2013-CH-100 No.9
2013/10/12

節目の 2 年？通過の 2 年？

後藤真[†1]

私は 2009 年度と 2010 年度に主査を拝命した。その時期のいくつかの成果と課題について簡単な報告を行う

Change Point? Or Usual 2 years?

1. 2007 年の幹事から主査まで

私は、2009 年度と 2010 年度にかけて、主査を拝命し、微力ながら、研究会活動の下支えができればと活動をしてきた。(おそらく、どの時期の主査も感じるであろうことだが）私の時期も、ある種の「節目」にあたっており、それらの「節目」を、どのように「乗り切るか」に腐心した記憶がある。実質的にできたことは決して多くなく、関係者に何とか支えられて過ごした 2 年間であった。

私が主査を拝命する前に 2 年間幹事を務めさせていただいた。その時期については、鈴木卓治氏から報告があると思われるが、まずは、私の個人的な状況とあわせてその段階から説明していきたい。

2007 年は、まだ私は大阪市立大学での日本学術振興会特別研究員（PD）であった。その時期は、相田前主査（当時）の時期にいわゆる「全国制覇」を完成させ、次の目標をどのように設定していくべきかを模索していくタイミングであったと記憶している。鈴木主査の時代に台湾での CH 研究会の開催を行い、日本からアジアへの可能性を開き始めたのが、当時の状況であった。私は、職業研究者としてのキャリアをはじめるかはじめないかの頃(翌 2008 年に花園大学に）であり、各地での調整などについて、慣れずにさまざまなことを模索していたという漠然とした記憶を持っている。

一方で、私がもともとの出身である日本史学畑では、大学院生が学会の諸活動を行うのは、むしろ当然のことであると認識されており、職を得た場合に、辞任するという場合もある会の委員も慣習的には存在した（決して「学生委員」などの特殊な名前があるわけではなく、普通の「委員」である)。そのため、ある程度の学会業務や会議には慣れたところもあり、その点で何とかすすめられた部分もあると記憶している。

また、この時期から、情報処理学会全体では「ペーパーレス化」が議論されており、鈴木主査が領域委員会で反対の表明をし続けている旨を聞いていた。しかし、結果的に「ペーパーレス化」は決定され、私が主査に就任する時期から、それは開始されることとなった。

2. 主査の時期の変化の特徴

2009 年から主査に就任した。当時は、なんと（？）32 歳であった。私が主査の時期の変化としては、大きく 3 つの潮流があげられる。一つは先述の「ペーパーレス化」であり、もう一つが「学界の国際化」、そして「研究会の新規目標の模索」である。

2.1 「ペーパーレス化」の諸課題

私が主査になった年から、「ペーパーレス化」1が開始された。いち早くオンラインに対応するという学会の方針からであったが、研究会としては、実質的な打撃となった。会員数は 300 名を超えていた状態から、一挙に 2 割減となり、250 名前後となった。また、冊子体が納入されないため、図書館などでの購入が止まったところもあるなど、実質的には研究会の広報・財政としてはマイナスとなったといえよう。

とりわけ紙での「別刷り」での情報交換を重視する人文系業界との境界領域である研究会の特徴からも大きな打撃となったことは間違いない。主査になった当初から抱えた重大な課題であった。領域委員会でも、再三の紙の「選択的復活」を要望してきたが、結果的に成功することはなかった。なお、この問題は、現在でも「若手研究者の会」を通じて要望を続けており、学会本体でも議論の対象とはなったようだが、復活の見通しはたっていない。

一時的な対応策として、研究会当日のみの冊子体配布が許可されたため、研究会の繰越金を消費しつつ冊子の作成を研究会の当日に限り行った。ただし、これは実質的に弥縫策でしかなかったのは、事実である。本来の冊子体の意味は、参加していない（できなかった）会員向けに報告の内容を「送付する」ことにあり、参加している会員に対してのメリットは薄いものであった。

†1 花園大学
Hanazono University

ⓒ 2013 Information Processing Society of Japan

また、繰越金の使用は、会の財政を圧迫することとなった。本来、学会は過剰な繰越金を持つことは好ましくない。当時、研究会は多くの繰越金を持っており、その使途についても対応を迫られている時期でもあった 2。そのため、当初は繰越金消化の目的もあった。しかし、繰越金を消化して冊子を作ることを前提とした会費設定を行い、それが継続した結果、繰越金を使い切ったのちに会費を値上げすることが困難となっていたようである。そのため、結果的に冊子体の継続は困難となっており、私の「負の遺産」が現在のいくつかの課題へとつながってしまっている。

2.2 学界の国際化

いわゆる「デジタルヒューマニティーズ」をめぐるいくつかの潮流が、日本において明確になってきたのもこの時期であった。2007 年からはじまった立命館大学の「日本文化デジタルヒューマニティーズ拠点」の活動も本格化すると同時に、日本におけるいわゆる Digital Humanities（DH）の動きも本格化してきた。2009 年のじんもんこんシンポジウム（立命館大学）ではメインテーマを「デジタルヒューマニティーズの可能性」とし、基調講演がアルバータ大学の Geoffrey Rockwell 氏によって行われた。また、翌年の 2010 年のじんもんこん（東京工業大学）では、キングスカレッジの Harold Short 氏による講演が行われ、「Digital Humanities における国際コラボレーション」というテーマでワークショップが行われている。2007 年には、先述の通り台湾で研究会を行い、2002 年には PNC/ECAI との共催のシンポジウムも行われているが、これほど連続して海外の研究者を招聘する動きは多くなかった。

また、会の「外側」でも、文化とコンピューティング国際会議（Culture and Computing）が 2010 年から継続して開催されており、これらの動きを受けて 2011 年には Japanese Association for Digital Humanities が作られ、継続してシンポジウムを行っている。

これらの急速な国際化の動きは、情報工学系の他分野でも同様であり、その大きな流れの中に位置づけることが可能であろう。いわゆる DH の動きが、人文科学を国際的な研究の中に位置づける重要な役割を果たすと同時に、情報技術が媒介となりうるという意味でも CH 研究会が持つ意味や位置づけを再度確認できる機会となったであろう。

一方で、研究会が持つ「人文科学とコンピュータ」という「枠組み」と DH の枠組みとの関係性や、国際的なポジション全体の中で、CH がどのような意味を持つのかという課題を否応なしに突き付けられることになっているのも事実である。CH 研究会は JADH 国際シンポジウムにも継続して後援を行っているが、これらの組織との関係性をどのように持たせるのか、そして、国際化の波をあまりかぶっていない人文系の分野と情報技術や海外へのハブとしてどのように機能させるのかが、今後、重要になってくると思われる。

この点では、JADH との連携や、第一回文化とコンピューティング会議に「日本における人文科学とコンピュータ研究の現状と課題―日本と国際動向の関係を探る―」という企画セッションを出すなど、いくつかのコミットメントを試みた。しかし、結果的には定着するに及んでいない点は、力不足であったということを認めざるを得ない。

2.3 研究会の新規目標の模索

研究会が「全国制覇」を達成したのちは、イベント面においての具体的な目標をたてるに至っていない時期であった。鈴木前主査の台湾での開催は、新たな試みではあったものの、通常の研究会を海外に持ち出すことは、査読を行っていないことなどのハードルが問題となり、定着が困難であった。そこで、台湾から引き続き、日本列島に近づく形で開催を行ってみようと、沖縄での開催を企画した。沖縄での開催自体は、通常の研究会とは多少異なる雰囲気・研究報告をできたことで、一定の成果をあげたのではないかと考えている。次の関野主査の時代の奄美開催などを考えても、特色ある地域での開催は、研究会の「味付け」としては、重要な部分があると考えている。

また、それ以外にも三重県で地方開催を行った。

しかし、それ以外には具体化は成功していないという現状はある。当時、「じんもんこんルネッサンス」の動きもあったが、前節の DH の動きとのバランスとの兼ね合いの中で苦労した。大型の科学研究費などを取るには、具体的な新規性を DH と異なる文脈で出す必要があったように思われる。また、人間文化研究機構のデータなどを有益に生かすなどの具体的な方策に至らなかった点も、個人的には反省材料である。一方で、現在国文学の文脈などで動いているいわゆる「マスタープラン」などの大型のプロジェクトとの関係が時期的に作れなかったことも、「じんもんこんルネッサンス」が軌道にのらなかったことの要因としてあるのかもしれない。

3. 新しい潮流と「できたこと」「できなかったこと」

上記のように見ていくと、反省点が圧倒的であり、新しい潮流の中で翻弄されて終わってしまったという感がある。もう少し、踏み出せれば動きがあったのかもしれないが、それを行うには、少々経験不足であった点が多い。単発的なイベントはいくつか行えたので、それが継続的な流れになりえなかったことが主要な要因であるといえよう。事実、じんもんこん 2009・2010 などの動きや、文化とコンピューティングなどがその例である。2009 年 7 月に人文地理学会歴史地理研究部会との共催で行われたシンポジウムは、最終的には『歴史 GIS の地平』として、一冊の書籍に結実し

ている。この書籍についても、人文系と情報系の文化の違いの板挟みなどになったが、ともかく、一つの「形」を作れたのは意義があったのではないかと考えている。

今後も、このような、まとまった「成果物」と研究会として出していくことは、研究会の記録と同時に成果の広報・公表の手段として重要であろう。特にペーパーレスになってしまって、情報が「送りつけられる」ことが減ってしまった以上、新たな形での情報提供の方法は模索され続けなければならない。そのための、研究会としてのあらたな成果公開の手法を検討するべきであると考える。

また、できたこととしては、研究会全体の「若返り」がはかられたことは、一定の意味があったのではなかろうか。私が研究会に出入りしはじめた、2002 年ごろには、同世代の大学院生・研究者はほとんどいなかったし、いても一度の研究会のみでいなくなってしまう人が多かった。しかし、私が幹事・主査をはじめたころから、研究会に定着する同世代がふえはじめ、現在、学術会議が定義するいわゆる「若手研究者」に位置する研究者の比率が、非常に大きくなった、ように思う。これは、単純に私が年をとった結果なのかもしれないし、おそらくは、実質的に紹介をしてくれている人物がいるからであるとは思われる。しかし、それらの若手研究者が一定の魅力を感じ、研究会に定着をし、恒常的に発表を行ってもらえるようになってきたのは、2010 年前後が一つの節目ではないかと考えている。

また、これにあわせて、研究会全体の水準が底上げされてきたこともあげられる。これまででも、研究会の中心的な人物による発表は一定の水準が保たれていたが、ともすると、人文系の成果は方向があさってで、技術的にも目新らしい面がないという発表もあった。しかし、それらの発表比率は明確に下がってきているように感じられている。また、じんもんこんでの Twitter 上での感想でも「面白かった」「これほどのものだとは思わなかった」などの感想をいただくようになっており、一定の水準が保たれている状況を作り出すことに成功している。

具体的に何か策を行ったわけではないので、私が主査時代にできたことというとおこがましいかもしれない。しかし、固定的なメンバーにとらわれず、多くの人々と議論する場を、という目標のもとに、そのような雰囲気を作ってきたという自負だけは持っている。

一方で、通常の研究会報告の本数確保が困難になりつつもあった。通常の研究会報告は査読付きでないため、特に業績が必要な若手研究者には魅力が薄く、その割には、求められる水準があがったため、本数がどうしても下がってしまった。

通常の研究会報告は、実験的な位置づけでもあるので、より討論の時間を確保するなどの方策をとることで、「実験場」であったり「情報の交流場」としての位置づけを強めていくことも考えていく必要があるかもしれない。

4. 今後の研究会に向けて

以上、反省点ばかりが目に付くことになってしまったが、今後の個人的な展望を述べておきたい。

4.1 他研究会との効果的なコラボレーションの必要性

CH 研究会は他団体との共催や後援などは、決して少ないわけではない。しかし、同じ情報処理学会の研究会との共催・会全体としての交流は極めて少ない。しかし、情報処理学会若手研究者の会などに参加し、情報交換をするかぎり、人文系コンテンツを利用した情報技術の研究への需要は、比較的多いのではなかろうか。特に、人文科学コンテンツは、比較的目線を離した状態で見られるうえに、複雑・多様・異質なものの混在という状況を作り出している。その中で議論や研究を重ねて作り出してきたデータモデルを、さまざまな形式で処理したいという要求は、それなりにあるようである。CH 研究会によるデータモデルの作成と、人文系とは異なるデータモデルのあり方との比較や議論などが可能であるし、処理系であればデータベースそのものを作っている研究会などとの交流が可能となるような気がしている。その意味でも、「若手研究者の会」の立場を活かしつつ、他研究会とのコラボレーションの可能性をはかりたい。同時に、CH 研究会が持つ最大の強みである「データモデルの研究」について、より議論が深められるような場を作れればと考えている。

4.2 人文系と情報系の協業のバランス

私が個人的にいくつかの CH／DH に関連する研究プロジェクトを進めていて、改めて感じるのは、協業の難しさである。とりわけ、人文系出身である私にとって「これを応用すればこれだけのメリットがある」ということを提示することは、比較的容易である。しかし、一方で、これが情報工学的にどこまでうれしいのかをはっきりと打ち出すことが困難な場合もある。私が進めているものの場合、人文系の課題解決が最初にあって、そこから情報工学の技術を検討していくので、おのずと私が主導する言い分になってしまい、情報工学が「使われているだけ」になっているのではないか、という危惧を抱くことがある。

近年、私は「情報工学から人文系が優勢の CH へ」という方向性があるのではないかと考え（反論するむきももちろんあるが）、そのこと自体が持つメリットとデメリットをいくつか考える機会を持っている。メリットは、情報工学側が出す技術が人文系で「実用的」になりつつある側面であり、デメリットは、先述の問題と、人文系の研究者が情報工学の技術選択を行う際の「感覚」の問題である。これは、きわめて微妙な言い方なのだが、今までは、情報工学系の研究者が問題解決を行う際の「プロセス」と「結果」についての、「感覚」的問題点について、指摘することが多かった。それは、前提となる資料の理解・特徴や研究史との関連性などを総体として表現するものであったように思

われる。同じ問題が、人文系が情報技術を開発・選択する際に生じているように考えている。前提となる技術やその技術の処理方法に潜む思想のような部分の問題点について、無理解であることがあるのではないかと。これが、新たな情報工学と人文科学の「溝」として認識されうる可能性がある。

これは、古くて新しい課題なのだが、結局「コラボレーションの先に何があるか」を問い返すと、この根本的な問いにつながる部分があるように思われる。

5. おわりに

CH 研究会が 100 回の開催を迎え、あらたなフェーズに入ろうとしている。CH 研究会の最大の特徴が「広く、既存の枠組みにとらわれず議論をする場」であると考えている。そのためには、可能な限り、多くの人を惹きつける場であることが重要である。その特徴を最大限生かせるような貢献を、今後も行っていきたい。

謝辞

頼りない主査であった私とともに、会のスタッフをこなしていただいた、上地宏一・鈴木卓治・関野樹・三宅真紀の四方にはあらためて心より御礼を申し上げたい。四方と一緒でなければ、主査をつとめあげられることはかなわなかったであろう。

参考文献

1) HGIS 研究協議会編『歴史 GIS の地平』（勉誠出版、2012 年）
2) じんもんこん 2011togetter http://togetter.com/li/226013
http://togetter.com/li/226440
3) じんもんこん 2012togetter http://togetter.com/li/408605

1 あえて「ペーパーレス化」という言い方をするのは、当時の表現がこのようであったことと、現時点においても、紙が PDF に変化しただけで、実質的な形式の変化が起こっていない。これを「オンライン化」や「デジタル化」という情報技術のメリットの面でとらえることはできず、単に「紙ではないだけ」という意味を込めて「ペーパーレス化」とする。
2 2010 年に学会は一般社団法人へと移行したため、会財政のより一層の透明化が求められていた。

ⓒ 2013 Information Processing Society of Japan